

能 大江山(後)

後ワキ (源頼光)	中山国雄	笛	中山晴夫	地謡	中山栄太
ワキツレ (頼光の従者)	中山英樹	小鼓	中山吉典	"	中山藤隆
" (頼光の従者)	中山和也	大鼓	中山平二	"	中山順一
後シテ (鬼神)	中山忠彦	太鼓	中山建	"	大滝正貴
間狂言	サキ 中山郁男	アド	中山金重		
後見	中山博之				

〔構想〕源頼光は丹波国大江山に住む酒呑童子と呼ばれる鬼を退治せよとの勅を奉り、山伏に変装して保昌及び四天王など五十人の家来を引き連れて大江山に分け入る。途中出会った女の手引きで酒呑童子の家に至り、道に迷った状態で一夜の宿を求め。垣武天皇の勅に従って比叡山を出て以来、出家には手を出さまいと決めている酒呑童子は少年の姿で快く一行を迎え、昔の経歴を隠さず物語り、酒宴を催して山

伏たちを歓待する。やがて酒に興じて舞い戯れるうちに酔い倒れて寝所へ入る。頃を見計らって、頼光が攻め込む。酒呑童子は頼光らを見て驚き立ち上がり、悪鬼の形相を現して猛威をふるうが、頼光は少しも頼がずに鬼神の首をあげ退治して一同は喜び勇んで都に帰って行く。

附祝言

大須戸能の由来

嘉永五年(一八五二)二月の記録に「古来の能装束が切損し役に立たなくなったので奉納を願う」とあることから推して大須戸能の起源はこれよりなお久しく遡るものと推定される。

伝によれば弘化元年(一八四四)の冬、庄内の黒川能役者蛸井甚助が当地に逗留した際、庄屋、神主など村人十九人の能社中が、数年にわたり熱心な指導をうけ、嘉永四年三月鎮守八坂神社の社殿ではじめて演能したが、当時既に式三番の外能十五番を習得していたという。

神社の境内には、蛸井甚助が帰郷する際、記念に残したといわれる「黒川や上に流れて花の郷」なる句碑がある。その後明治、大正、昭和にかけて更に庄内黒川より師を招き、新たに十番を習得した。

能が神事として演じられたのは、昭和七年八坂神社が村社に昇格してからで、以前は一月十一日の山神祭の日と、四月三日の節句に演じられていた。

八坂神社の境内には、古くから、能舞台が設けてあったが、雪害で壊れて以来しばらく再建を見なかった。その後、大正二年三月大正天皇即位を記念して建設した能舞台も老朽化し、昭和六十三年現在の能舞台が新設された。

中山家との関係

集落の旧家中山与惣右衛門家は、創立当時より代々能の斯道奨励の衝にあたり、能装束をはじめ幕、組立式能舞台、能面等の寄進、後継者の養成など伝統芸能の維持につとめ今日に及んでいる。

新潟県魚沼文化財

大須戸能楽組

鶴亀



とき 令和3年4月3日(土) 午後1時  
ところ 八坂神社能舞台

新潟県村上市大須戸  
大須戸能保存会

謹啓 陽春の候皆々様益々ご清祥のことごと同慶に存じます。  
 来る四月三(土)午後一時から大須戸能舞台において左記の曲目を神事能  
 「定期能」として演ずることにいたしました。  
 今年はコロナウイルスの禍から集落外にはご案内せず、集落の行事として  
 行うことに致しました  
 つきましては公私共にご多忙のことと存じますが斯道奨励のためお差繰く  
 ございましたらご来観賜りますようご案内致します。  
 敬具  
 令和三年三月吉日  
 大須戸能保存会 会長 中山定一郎  
 追伸 当日は、当地域ではコロナウイルスの感染は見られておりません  
 がマスクの着用をお願い致します。

能役割と略解説

能式

翁	中山栄太夫	笛	中山金重	地謡	加藤藤二隆
千歳	中山博之	小鼓	中山晴夫	中	中山平
三番叟	中山晴剛	大鼓	中山英樹	中	中山国平
後見	中山穂積			大	滝正貴

〔構想〕 一日の能の最初に演じられる曲で、天下泰平国土安穩を祈禱

し、且つその演能の場を清浄する舞曲である。

能鶴亀

ワキ(大臣)	中山和也	笛	中山晴夫	地謡	加藤藤二隆
ワキツレ(従者)	中村碧士(小五)	小鼓	中山吉典	中	中山博
ワキツレ(従者)	中山蓮(小五)	大鼓	中山和衛	中	中山平
ツレ(鶴)	中山淳一	太鼓	中山国雄	中	中山忠彦
ツレ(亀)	大滝正貴				
シテ(皇帝)	中山順一				
後見	中山栄太夫				

〔構想〕 新春に支那の朝廷で四季の節会の事始めが催され、不老  
 門に於いて、天子は百官卿相の拝賀を受け、萬民も群衆して礼拝す  
 る。拝賀が終わると、嘉例によって鶴亀を舞わしめ、その後、天子も

舞楽を奏せしめて、自ら舞い、聽て長生殿に還御するので  
 ある。短い中にめでたい文句を並べた新春の祝曲である

狂言附子

大名 中山吉典  
 太郎冠者 中山金重  
 次郎冠者 中山郁男  
 後見 渡辺昌

〔構想〕 太郎・次郎両冠者は、主人(大名)の留守中、大毒とされた  
 附子の蓋を開け、砂糖であることを見つけ、皆食べる。その後主人の  
 秘蔵の品を壊しておき、主人が帰ると、大切な品を壊したので、死の

うと附子を食べたが死ねないと言い、主人に追われる。  
 註 附子はトリカブトの毒